

會



報

1954年7月

174

日本山岳會

サマより

ガネツシュへ

堀田 彌一

今回のヒマラヤ遠征は昨年度の経験に従い、全力を挙げてマナスル登頂を目指し計畫を進められたのであったが、登攀の根據地であるサマ附近の村人の激しい反対に遭い中途よりガネツシュ・ヒマールに轉向を餘儀なくされた。

キヤラバンの第十三日目の四月二日に我々はニヤックに到着したニヤックでは第二回目の休日を取る事になつていたので一日先に出た先發隊と一緒に戻つた。その時我々にとつて甚だ面白くない情報が入つた。即ちサマでは登山隊を激しく排撃しており、協力者には五〇〇ルツピーの罰金か鞭の體刑を加えるとの事であった。それがため我々のポーターの中にいた数名のチベツタンが解雇を申出た。排撃の理由は最近起つた雪崩のため、ゴンバ(僧院)が潰されラマニが三名死んだ事と、昨年は不作のため飢饉であつた事等でこれ等は登山隊が山を荒したためであり神聖なる山神の怒りであると言ふのである。

然し我々は眞疑の程を十分確める事が出来なかつたのと未だ直接身邊に變化が起らなかつたので、一應ジャガートの兵隊に巡視を希望する手紙を出したが豫定を變更

する様な事もなく行進を續けた。ニヤックを過ぎてから住民は凡てチベツタンで翌日ビイーでは食糧の購入が公然とは出来ず、利を以て夜中の一時頃懐中電燈を合圖に僅かのものを得たに過ぎなかつた。ビイーから暫く行くと松ヤトウヒの素晴らしい針葉樹林帯にさしかかる。足許に神経がくたびれる様な絶壁の高巻や、對岸から見ても五〇度もある急峻な岩峯を目先から遮つてくれる縁と、直射をさけて涼しい空気を保持よく肌に味わしてくれこの邊は長い旅の憩であつた。森林地帯を抜けるとナムルーの部落がある。併し人だかりも少く、クツタン・コトラ(ブリ・ガンダキの上流)も目先が廣く開けて二キロ程先の低い木の生えた青々としたゆるい臺地が今日の泊り場であるため、餘り氣にもとめないで進んだ。泊り場は芝地で廣くその端を小川が流れ直ぐ上が瀧になり下には残雪を貯えた良い場所であり、廣く開けた谷の上流にも下流にも氷雪の山が見え景勝の地である。唯午後になると風當りが強くなるのがキャンブ地としてマイナスと言へば言える。

★ 先發隊の置手紙によりニヤック以來の噂の事實である事が段々に實證されて来た。彼等がナムルーで休憩中に入れた情報では數百のチベツト人が集結し(プロック部入りより一〇〇名加し)我等のサマ入りを阻止せんとする云々、とあつた。夕方日が暮れてから先發隊より来た傳令によると、昨日迄眞疑の程が不明確の處もあつたがサマの登山隊に對する惡感情は全く事實で今後の行動の上に重大な影響を來すに至つたとあり、スーパールと稱するこの地方のチベツト人部落全體のヘッド・マンの許可なくしてサマに入る事は不可能であり、このまゝ長く此處にいる場合は煽動により容易に暴力化する恐れありと。そしてその對策として

- 1 全員荷物を置いて(ローの奥の森の中に)明日實地に退避する。
- 2 直ちにスーパールの許に使者をだし諒解を求め。 (スーパールはシヤール・コラの奥地チヨウコングと言う部落に在る)
- 3 スーパールの許可なき場合は根本的對策を要する。
- 4 ネパール政府への懇請をも考えられるがサマの村人はこれに従わぬと稱している。
- 5 明日午前十時迄に指示がなければ退避行動を起す。

★ 四月六日早朝我々のテントは數十名のチベツタンに圍まれた。その中には白馬に跨つて盛裝した若武者らしいものも三名程いた。別に何うする譯でもなく、言葉が別かないので何の事かよく理解出来ないが何となく不氣味な空氣が漂い、シエルバもすつかり元氣がな。昨晩傳令に來たポーターも歸る事を拒んだ。大勢のポーターの中にも先發隊への使者はない。隊員とシエルバの行動は出来るだけ慎み、テントを離れない様にしなければならなかつた。彼等チベツタンの憎しみはポーターにはなく、隊員とシエルバに限られていたからである。やがてチベツタンが一人二人と去つてキャンブ地も平靜に戻つた。十時頃山崎がポーターを連れ連絡に來た。先發隊はローに行く途中、投石やその他の脅迫に遭つた事を話し、強行突破してベイス・キャンブに入るべきか引返すべきか最後の決断を相談に來たのである。我々はこの様な状態が隊が二つに分れていての不便とこれ迄の様子から、先發隊に此處まで引下つてもらう様返事を持つて山崎等は直ちに引返した。三時頃傳令が來た。交渉の餘地がなく先發隊が引返しつゝあると。山崎等が戻る途中先發隊が引返して來たのに會つたのである。四時頃村山が來て一切がわかつた。午前八時サマの入口の廣場で村山、デリー及びガルツェンの三名が數百名の村人に取圍まれ、サマ側の代表者と會見する事を許された。併しそれは絶対的なものであつた。即ち、マナスル登山とサマ入りは絶対に拒否する。若し強いて來るならば最後まで戦う。村を放棄してもポーターが歸つた後、我々とシエルバの首を悉くはねると凄じげなスチュア入りでの宣言であつた。そして圍む村人の女、子供に至る迄牛の糞を搦んで身構えていたとの事であつた。

隊員全部で協議したが兎に角スーパールに懇請し、彼を動かして今一度サマ入りを試みよう。併し、此處に荷物を置いて隊員とシエルバだけ残る事は危険であり、假令

直接の危害がさげ得られたとしても動きが取れなくなり、老大な荷物は放棄しなければならなくなる。そこで安全地帯のジャガートにニヤック迄現在のポーターで荷物運んで置く事が必要であつた。四百数十人の部隊が急峻な山腹を縫つて断崖の端にも、激流の上の丸木橋にも、岩壁に石を積んだり木を渡したりしてある棧道にも蜿蜒として續いた。四月八日に我々は再びニヤックに戻つた。そして既に豫算を超過している人夫賃の節約を算るため夜遅く迄かつて支拂を濟ませ、雑用の數名を残し全ポーターを解雇した。又東京を始めネパール政府、カルカッタ總領事館その他へも報告と共に諒解を求めると手配をした。

★

翌朝七時半頃村山、デリーがシエルパのイランギヤールと數名のポーターを連れてスーパールの許に行つた。彼等が歸つて来る迄には最少限五・六日はかかる。その間我々はニヤックの村のヘッド・マンに會つて協力を求めたり、ポーターを集める相談に一生懸命になつた。又裏山に登つてヒマル・チュリーを望み、遠望乍らチュリン・コーラからのルートを探した。併しチュリン・コーラそのものは廣く開いた興味ある谷の様に見えたが頂上へのルートとなる様なものは見當らず、登頂の可能性と希望が見えなかつた。ガネツシユ山群も見えたが山が重なつているのとやゝ遠望の爲ルートの偵察にはならなかつた。

四月十四日の午後村山等が歸つて来た。待ち構えていた我々は彼を取圍んだ。スーパールとの會談は次の如くであつた。

サマ及び附近の部落の代表三名並に従者三・四名がビーイーの部落より近道して既にスーパールの許に先着しており、そこで計らずもスーパール中心に再びサマ側と登山隊側の會談となつた。併しサマ側が強硬でマナスルの登山とサマ、ローリランダ、プロック、ビーイーの五ヶ村に入る事を拒否して譲らずスーパールが我々の側に非常な好意を示してくれたにも拘らず如何とも出来なかつたと。若しそんな事をすれば鹽のルートも止り、今後サマ等の部落が荒れるばかりだと色々聞かせても應ずる見込がなく、遂にスーパールも彼等の主張を認めざるを得なかつた。仕方なく他の方面に入る事の承認を求めた處、スーパールは諒解し、ことにガネツシユへの轉進には協力して呉れるとの事であつた。

またサマ等の村人が我々を拒否する理由はこれ迄も屢々聞いている通り、今年は降雪が多く大崩雪のため、三〇〇年来のゴンパが潰されラマニが三名死んだ事。昨年の夏は雨が降らないうち旱魃のため、飢饉であつた事が主なるもので、昨年シエルパが村人を喧嘩した事を未だに根に持つて居る事や、天然痘が流行している事も附加えられていた。

★

そこで我々はガネツシユへ行く事を決め、早速ポーター集めに取リかかつた。併し仲々ポーターの集る見込がたゞず、ことにニヤックの村では前の話とは違つて僅か二三人との事であつた。十六日の早朝通譯のサガを状況報告と協力を求めるためジャガートに派遣した。十五日にはボデイ・ガードと稱するスーパールの子分が来て協力してくれられたと、デリーやシエルパが通行の鹽運びポーターを一人残らず捕え勤誘したお蔭で、十六日にはやつとの事で四十人位のポーターを獲得する事が出来た。我々の手持ちポーター十名を加え、四月十七日には谷口・加藤・村木・山崎・大塚の五名とシエルパ八名、ポーター五十九名と先發隊をガネツシユへ向け送る事が出来た。先發隊が行く途々鹽運びのポーターや村人を誘つてくれたのと、下の方にも四ルツピー半のポーター賃が漸く擴まり、一三〇人のポーターがその日の中に集つた。十八日にはガルチエン外七名のシエルパがボデイ・ガードと共に一〇〇名のポーターを連れてガネツシユへ、セメント外三十五人のポーターがジャガートへ荷物を運んだ。そして十九日には残りの隊員とシエルパが三十名のポーターを漸く集めてガネツシユへの移動態勢を完了した。一方残つた荷物はカトマンズへ歸る通譯のサガに託し、ジャガートへ下してもらう事にした。

往路をタラー迄下りブリ・ガンダキを對岸に渡つた處で泊り、翌日から新しい途を辿る事になる。ビイラムの部落は耕地も廣く餘裕のある部落であつた。對岸にそそぐチュエリン・コーラの奥にヒマル・チュエリンの大きな山容が湧き上る雲で次第に隠れつゝあつた。樹木の種類も量も對岸に比べずつと多い様で、移り變る變化を楽しむ事が出来た。既にブリ・ガンダキはクツタン・コーラとシヤール・コーラに分れ、我々はシヤール・コーラに入つて来た。サルテイ・コーラの出合附近に來た時先發隊のポーターが歸つて来るのに會つた。

★
彼等は身振りたつぷりでトムジエでチベットに追い歸えされた事を話した時、又もや第二のサマ事件を想像させ、一時は憂愁にくれたが間もなく通信があり、無事解決してベース・キャンブに向つた。先發隊が最後の部落であるトムジエを過ぎた時、後から追いかけて來るトムジエやシイブチの村人に阻止されスーパールの許しを得ている事を話したが書面によらず證據がないため、聞き入れられず村木等がスーパールの許に再び許可書をもらいに行つたため、トムジエに一日停滞する外なかつた。併しスーパールの手紙をもらつて來た事と、翌日ポーター隊についているボデイ・ガードが來てポーターの一部を村人に代えた爲この事件も無事に解決した。

サルテイ・コーラの出合から先は溪谷や山容が美しく、變化に富んでいる事と日射が遮ぎられるので助かつた。チオルテンのある芝の綺麗な臺地は景色も気分も申分なく、我々はグリーン・ヒルとかタイガー・ヒルと稱していた。そこから連なるシイブチエはチベット部落で家數も可成り多く、裏には廣い麥畑と森林で蔽われて、山がある爲灌水にも事缺かないらしい。併し道は部落の崖下を通

つているため氣附かずに通つたが歸路この麥畑のチオルテンの傍に立つて、部落の屋根の上からスリンギ・ヒマールに盛り上る對岸の山々を眺めた時思はず嘆息をもらした。

トロ・ゴンパ・コーラは部落もないのに高巻きのよい路が氷河のモレーンの蔭まで續いていた。チオルテンも幾つもあり、丁度トムジエとベース・キャンブの間にはゴンバもあつて、そこから見えるマナスルの印象は忘れられない。石楠花も至る處に咲いていて眞紅なのや桃色のや色の變化も珍らしかつた。美しい森林を抜けるとカンバや石楠の灌木の生えたモレーンの端に出た。岩と氷で切り立つたガネツシユ・ヒマールの山々に包まれて、モレーンの蔭に残雪が残り、可憐な高山植物が綻びんとする中で、四月二十二日に至り、まる一ヶ月間の長い彷徨も漸く落ち着く先を見出したのであつた。



西歐各山岳會の活躍

ヒマラヤにおける獨逸伊瑞



＝吉澤一郎＝

コラムについての正しい(と思われ)情勢を御紹介しておこう。

ダウラーギリー

(八一七二米)

一九五三年隊のごとく新聞報道によるとアルゼンチン隊の隊長フランシスコ・イバネス中尉は八千米(?)に達したが凍傷に罹り、カトマンゾーに運ばれてから六月三十日に遂に病院で死んだということである。

一九五〇年にはフランスのエルゾグ隊が東面を試登して五五〇〇米までしか達していない。

一九五三年にはスイスのAACZ (Akademischen Alpen Club, Zurich) は七人の登山隊をこの山に派遣した。

隊長以下次の通り
隊長 Bernhard Lauterburg
隊員 André Roeh, Peter Braun,
Marc Eichelberg, Hans Huss,
Ruedi Schatz,
Knecht Pfisterer

近頃の新聞を見ているとヒマラヤやカラコルムへの遠征隊の情勢に關する限り報道がまるでこんがらがっているのだから本當やらさつぱり解らない。例えばガルピヤン(アピーの附近、ネパールとクマオンの境、カリー河畔にある部落)發のロイターがイタリイ隊の事故を打電していたり、テリイ・ガルワールに行つていたり、アビーの頂上から墜ちて死んでしまつたり、もう既に登山を實施中のヘルヒツヒコーファー隊が秋に出かける査證を得たとかいう類である。兎に角それらに迷わされないように最近のヒマラヤ、カラ

〇〇米以上まで達した。

二十九日、この日は丁度エベレストの頂上にヒラリーとテンジンの二人が登りついた日だが、ブラウンとシャツツの二人はイラ・テンジンの他と共に午前二時にC5を出發、テンジンは機械のように猛烈にラツセルをしながら登高、七時頃七〇〇〇米の高度を通過し、八時頃「Birne」(梨の實の型をした岩)の上七二〇〇米のところまでシェルパ三人を歸えした。二人は十四瓶の酸素吸入器を擔いでいたが十二時頃岩壁の下に達した。それから七七〇〇米まで岩場を攀じていつたが、西北稜への道はなかなか厄介であり、その上時間も不足して來たので遂に諦めて引返した。

彼等はその後南の科尔(五五〇〇米)や北東の科尔(一九五〇年にフランス隊が東側から登ろうとして果さなかつたところ)を西側から登つた。

アビー (七一三二米)
ナンバ (六七五四米)
サイバル (七〇三四米)

—オーストリー隊—
外科醫のヨナス博士(Dr. Rudolf Jonas)が隊長。オーストリア人だけのヒマラヤ遠征は之が最初であるという。
彼は一九三八年にR・シユワルツゲルバーの隊に参加してガルフールのガングトリー山群へ行った経験者。隊員は次の通り
Dr. Hans Beyer, (測地學者)
Hans Chval, (22), Reimund Heinzel, (22機械技師), Fritz Moravec (32), Josef Peffer

(33), Karl Prein (26), Karl Reiss (29)

三月に歐洲を出發、西ネパールは四月から七月までいる豫定であったが、外電によると隊長は胸部疾患に罹つたという。ガルピヤン發のロイターから想像すると一人が丸木橋から墜ちて溺死したらしい。一九五五年にも再舉の豫定がある。

ガツシャープルムI

(八〇六八米)

この山へは一九三四年にドイツ隊、一九三六年にはセゴニニユ隊が入つてゐることは周知のことである。
今年ドイツ隊が四月に故國を出發して最初はK2のつもりであったが、イタリイ隊が攻撃するのでヒドウン・ピークに目標を變えた譯である。

隊長以下次の通り

隊長 Dr. Karl M. Herrlich offer

隊員 Fritz Anmann (44), Albert Bitterling (42), Hermann Köllensberger (28), Kuno Rainer (39), Michel Anderl (39), Sepp Jöchler (?), Ernst Senn (41), Günther Hauser (25), Hellmut Schmidt (25), Toni Messner (25), Lionel Terray (?)

科學 Prof. Dr. Hans Reichel, Dr. Joachim Fisher, Dr. Hellmuth Heuberger, Wilhelm Kick
テレイは一九五〇年にアンナプルナに参加し、イエクラとゼンの二人は一九五三年にマツターホルンの北壁を完登した男。

K2 (八六六一米)

—イタリイ隊—

秀	山	井
	Skiと山の用具	
プライス・リスト進呈 電話東京 28 8456・7414 (事務所用) 中央区横町1の1 東京駅・八重洲口ヤンマービル横丁		

今度のイタリー隊は二年計畫で行つてゐる。昨一九五三年八月、A・デシオとP・カシン(Piccarto Cassin)の二人はバキスタんに入りラフルペンディでK2から戻つて来た米國のハウステン隊に會つた。

カシンはグラランド・ジョラスの北壁並びにバディレ北東壁の初登攀をやつてゐる。

デシオは一九二九年のスポレット隊に参加してバルトロの經驗がある。九月二十三日、當時のBC(五三〇〇米)に達し、偵察の後十月十八日ミラノに戻つた。

今年にはCAAI (Club Alpino Academic Italiano) が中心で、山案内人も多く混つてゐる。本隊は三月三十日にゼノアを出たが、同じ船にピエロ・ギリオネの隊も乗つていたらしい。

参加隊員は随分多いが右のと左の通りになる。

- 隊長 Dr. Ardito Desio
- 登山隊
- Enrico Abram (31), Lino Lacedelli (30), Gino Solda (46), Sergio Viotto (25), Mario Puchoz (30), Ubaldo Rey (30), Ugo Angelini (30), Walter Bonatti (23), Cirillo Floreanini (28), Galotti (34), Achille Compagnoni (38)
 - 醫療 Dr. Guido Pagani
 - 科學班
 - Ing. Francesco Lombardi, Prof. Marussi, Dr. Bruno Zanetti

六月十五日から二十三日までで第一回、七月二十五日から八月二

十日までを第二回と攻撃を二回に分けた長期作戦でやつてゐるところは大したものである。われわれも少し許り見習わなければいけない。

ラカボシー(七七八八米)
デイステギール・サール(七八八五米)

——獨逸合同隊——

新聞によるとラカボシーの一方既に失敗してヒスバル氷河の北側にある西部カラコルムの最高峰であるデイステギール・サール(又はタストーギール)へ向つたらしい。

隊長以下を御紹介すると次の通り
隊長 Mathias Rebitsch (42) 彼はアルプスにおける岩と氷の經驗者で、一九三八年にはナング・バルバットで銀鞍まで登つてゐる。ピレネー、ラブラントにも行き、一九五二年にはペル南部のゴルディレラで六千米級の處女峰三座を征服してゐる。

- 登山隊
- Dr. Paul Bernett (26), Anderl Heckmair (47), フォーガーの北壁(登) Gerhard Klammert (29), Martin Schliesler (25)
 - 科學班
 - Dr. Wolfgang Pillewizer, Karl Hechler, Dr. Karl Heinz Patten, Hans Jochem Schneider, Dr. Karl Wienert (一九三九年ドイツ「チム」ト遠征隊員)
 - カメラ Eugen Schumacher
 - テリー・ガルワール

——イタリー隊——

ヒマラヤが各民族に公開される傾向になつて来たことは、何れにしても戦後の快心事である。日本の山岳界にも世界的な光明が差し込んで来た感じである。

アルプスより近く、更に遙かに廣大な地域に亘つてゐる、そして東洋的な親みをもつヒマラヤの山地が、私たちの前に道を開いたことを私たち登山人は心から愉快を禁じ得ない。

エヴェレストが遂に登頂され、ナング・バルバットやアンナプルナなどが次々に人間の足痕を印すようになった。しかしこの位高大な、地球上最高の巨峯群の登攀は、幾度登山がくり返されても、それは少しも探検の値を損するものではない。

初登攀は勿論賞揚すべきだが、二番乗でも三番乗でも、或は十數番目でも、その感銘も効果も殆ど問題にならない程大きい。

越中の劍岳三〇〇三米が最初に登られた當時でも、それから二十番目位まではこの峻峯の登攀は登山人の間に非常な興味と注目をひいた。まして八〇〇〇米を越える荒涼とした自然、恐らく今後幾世紀を経ても人力を以て變形を爲し得ない、天界に聳ゆる壯麗な

高層建築は、登頂の成功、不成功はとにかくとして、世界登山人のメッカとして、登山の最高級の目標として、今後續々登られなければならない。

腰をおちつけて、條件がととのうのを待つて、長期に亘つて幾回でも探検隊を送ることは、日本の山岳界に課せられた喜ぶべき問題だと思ふ。この意味から「ヒマラヤは楽しみだ」と私は云いたい

したがつて漸次幾多の資料を集積して、ヒマラヤ登山のため、子

ヒマラヤの楽しみ 冠 松次郎

々孫々までそれを引繼いでゆくことは、現代山岳人の責務であり、誇りでもある。

顧みると、昭和十五、六年の交、日本の軍隊が支那の奥地まで進出した際、私はこの日本の進出によつて、終戦の後には、我山岳人も面倒な英領印度からではなく、支那の奥地から、黄河や揚子江の源流地に蝟集する世界の屋梁に向つて探検の歩を進め得るものと私かに喜んでゐた。しかしあま

りに行き過ぎた我軍の行動は、却つて敗北を招き遂に不名誉な終戦となつた。

戦後は何事につけよいことは一つもなく、内地の山岳地でさえ、一般の人の多く登る有名な山々はとにかく、天幕を携えて溪の奥を探るような旅は容易に出来にくくなつた。

ところが、戦前には英國の支配下にあつたために、印度の奥地、殊にヒマラヤの旅行は極度に制限せられ、殆ど登攀不可能の状態であつた。その印度が獨立國となつたおかげで、ヒマラヤの登攀も遙かに都合よく容易になつた。このことは、たつた一つ、戦後に私たち山岳人に

與えられた最大の恩恵であると思ふ。

私は既に古稀を過ぎたので、ヒマラヤの登攀は及びもつかないと思うが、しかし若し事情がゆるすならば、せめてベースキャンプまで登つて、大ヒマラヤに面接する光榮を得たいと思つてゐる。



ガルワール西部のテリール地方で科学的調査を行うため例のギリオネ氏が率いているもの。ヤクを一口頭アルプスへ連れて行き飼養してみるところである。

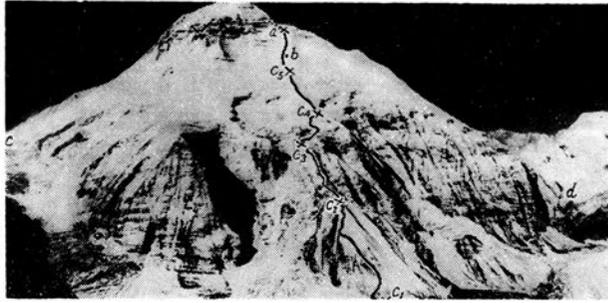
隊長は Ing-Piero Ghiglione 隊員には Dr. Roberto Bignami, Giuseppe Barenghi, Giorgio Rosenkrantz (医者) 等がいるが最後の二人は新聞によると墜死したらしい。

ギリオネは今年七十一才であるが昨一九五三年には Felix Marx と共に南米で Lasontay (5700 m), Colquepunco (6000m), Halancoma (5620 & 5685 m), Huacrañanca (5910m) 等に登つてゐる豪の者である。

ヘルベルト・ティツ ヒイのこ

一九三六年にはグルラマンダータ(七七二七米)に試登、カイラースを訪れ、'Zum Heiligsten Berg der Welt' 他の著書のあるオーストリアの有名なアジア探検家 Herbert Tichy が一九五三年の後半カトマンズから出發して一千軒歩き、新しい土地を八〇〇平方軒も踏査し、その上、六千メートル以上の山を幾つか登り——その最高はムスタンの北西にあるカンデムール(Kangdemur, 6480 m) 秋には南方からサイパンを狙つて失敗し、五三年の末に故國へ戻つて来た。

写真はどうラギーリーの北面一九五三年スイス隊ルート
a 最高到達点七七〇〇米 b 梨の
実 c 北東コル、d マヤンディコー
ラ、C₁(?), C₂(五一〇〇〇米)、C₃
(五五〇〇米)、C₄(六〇〇〇米)、
C₅(六四〇〇米)



をしていゝという。
トニー・ハーゲン
博士のこ
Dr. Toni Hagen はスイスの地質學者であるが、現在はネパール政府に備わられてその道の仕事をやつてゐるらしい。
一九五〇年にゴサインターン(八〇一三米)の空中寫眞を撮つてゐるが、一九五二年の秋からアイラというシェルパを一人連れ

てランタン谷の上部にあるゴサインクンド經由、六一五〇米の峰に登つてゴサインターン(西藏名シシヤンマン)を偵察し寫眞を撮つて来た。その時の寫眞の一部が「ベルグシュタイガー」の今年の二月號に出ている。
★
その他の細かいヒマラヤ情報についてはいづれ機会があつたら追々に御紹介して行くつもりである。

ウエストーン祭

今年六月二十六日に行われた。本部から日高、三田、小原、東京支部から村井、坂倉兩女史など、關西支部から常連の藤木さんが夫人同道で御入來、九州や山陰からも参加者があり、時を同うして行われた信濃支部の國體登山豫選(一泊の西穂高行き)参加者など百名ばかりが細雨の下に梓川畔の碑前に花を捧げ、高山支部長、日高副會長の挨拶あり、次いで白樺莊に移つて日高、三田兩氏の講演、夜は信濃大學田中邦雄助教授(支部委員)の講演とスライドに樂しい集いを終つた。
翌日も雨は止まず、西穂に出かけた人は少なかつたが、時々もれる薄日に芽える新緑を賞でて明神池から徳澤邊を漫步する組もあり、登山期に先がけて静かな上高地の初夏を楽しんだ。
毎度のことながら信濃支部のかたがたの勞を多とする。(S・H)

星仁一郎の遭難

藤島 玄

越後三山の雄、駒ガ岳の駒ノ小屋開きは、五月一日、高頭仁兵衛翁御夫婦、武田久吉博士、楳有恒會長を迎えて開催されました。(會報一七三號參照)

その際主催者伊倉剛三君の片腕となり、接待員として立振るまつていた星仁一郎君(四一三〇番)は、その小屋開きの前日旋風に吹飛ばされた駒ノ小屋の復舊に五月廿三日人夫三名を伴つて登山、翌廿四日伊倉君も登山合流して、駒ガ岳頂上直下のオツル水澤の雪溪上に散亂している小屋の用材集めに働いた。午後三時頃人夫一名は家事の都合上下山。それより星君は駒の頂上へ撮影に行き、歸つて軽い夕食の後突然下山することを云い出して、五時頃單獨下山した。コースは往路と同じく、小倉山經由の尾根道である。

殘留の伊倉君人夫二名は、八時頃からの暴風雨をオツル水澤の雪溪に堅穴を掘り、ストープを入れ小屋の殘材を屋根として夜を明した。廿五日も大荒れで作業もできないので下山と決して、九時出

發、小倉山經由、駒ノ湯へお晝、お湯温泉に二時頃歸着した。
意外にも星君は歸つていない。以來地元消防團、村の有志の方々が延五百名以上も出動して搜索に當られたが、現在に至るまで行衛不明である。
六月一日、藤島玄、金山淳二君等會員十五名が大湯東榮館に集結し、小屋より約五十米上に残つていた星君のタオルを中心に頂上附近一帯の搜索に當つたが得るところなく終つた。然しすくなくとも北ノ又川、佐梨川源頭の雪稜、雪溪上にいない事だけが確認された。搜索も時日が経過しているで、もう第二段階の持久戦法に入り、小數精銳が澤の中下流や灌木帯の搜索に當ることになった。
この方面へ登山の方々は新潟縣北魚沼郡小出町伊倉剛三君と連絡の上御協力を願いたい。
右を取急ぎ報告します。尚伊倉君より、その後の詳報があると思ひます。(二九・六・六)

フランス隊のヌン初登頂 と アコンカグアの新登頂

近藤 等

一、ヌンの初登頂

昨年の夏、フランス隊がヌン・クン山塊のヌン(七一三五メートル)の初登頂に成功したことはわが國の新聞にも一寸發表されたので御存知のことと思う。この遠征の正式の報告書はまだ出ていないので、分つた範囲内で紹介しておく。

隊員は前年ペルーのサルカンタイ初登頂に成功したコロド・コガン夫人、ベルナル・ピエール(隊長)ジャン・ギユマン、ミシエル・ドゾルベイ、Leliの宣教師ピエール・ヴィトズ(スイス人)これに印度軍 N.D. Javal 中尉、K.C. Johorey 大尉の一行であった。一行はドダを七月十三日に出發し、Kishwar, Yurod 經由二百五十軒の遺路を行進し、七月三十日に山の南麓に到着した。これまでのヌン試登は東稜から試みられたものだったが、この年は前年ヴィトズが偵察した西稜をルートとして採用した。五四〇〇

mに第一、五八五〇mに第二、六四二〇mに第三キャンプが次々と設けられた。八月二十三日、悪天候のために第三キャンプから下降中、ヴィトズ、コガン、ギユマンのザイル・パーティとアン・タルキー、ドゾルベイ・ピエールのパーティはともに雪崩に襲われ、前者は五〇メートル、後者は三〇〇メートル流された。幸に打撲傷と脳震盪程度で済んだが、ひとまずB・Cへ引上げねばならなかつた。そして再びアタックした結果、八月二十八日にコガン夫人とヴィトズによつて頂上は極められたのである。

頂上直下の最後の五〇〇メートルは雪崩の危険をはらんだ雪のフエースで、二名の登攀隊はこれを斜にトラヴァースして頂稜に達し、ここから頂上は間近のところであつたという。

二、アコンカグア(一九五四)

フランスのアコンカグア遠征は五二年のリオネル・テレイたちの登頂につづき、本年が戦後二度目であるが、今回の特色は南壁のアタックというヴァリエーション・ルートによつて登頂したことである。

この目的の下に昨年十二月ルネ・フェレを隊長とし、パリ出身の一流の登山家リュシアン・ペラルデイニ、アドリアン・ダゴリー、エドモンド・ドニス、ピエール・ルズモンド、ロベール・パラゴギー・プウレの一行がアルゼンチンにおもむいた。

一行は高度四二〇〇mから五八〇〇mの間で三週間を高度順應に過し、且つこの間に南壁に二つの

前進キャンプを設けた。

B・Cから出發したダゴリー、ルズモンド、パラゴ、プウレは一週間を登頂し、第二キャンプから上部のルートを開拓に先發したペラルデイニとドニスは九日目に登頂した。第二キャンプから上はテント場がないため、氷壁に何度もビヴアークせねばならなかつた。ルートは南壁を正面にみて、北峰へのダイレクト・ルートをとつたが、下部の岩場は非常に悪くアルプスでのVもしくはVIに相當する箇所もあり、第一キャンプから第二キャンプまでの間には四〇〇mの固定ザイルを張つた。次に登路はもつぱら氷となり、多大の障害があつたが、とくに一五mのオーバーハンクした箇所は六〇〇m以上の高度でのアクロバチックな登攀を強要された。

六名の隊員は二月二十五日の夕方頂上に立つたが寒氣と疲労に酷く悩まされていた。幸いその夜ノーマル・ルートから一行をサポートに登つたアルゼンチン陸軍の兵隊たちに迎えられる。

登攀中は幸に天氣が良好であつたが、もし荒れたら遭難は避けられなかつたところであろう。

六名の隊員のうち凍傷にやられていないのはパラゴ一名で、他は両手兩足を凍傷に冒されメンドサの病院で手當を受けたが、数名は手足の指を幾本か犠牲にせねばならなかつた。

ポール・パウアー氏 からのメッセージ

ドイツにおけるヒマラヤの權威

者の一人として、カンチエンジュンガの名と共にわれわれに親しまれているポール・パウアー氏からこの程在獨中の東大OB小谷氏を通じて本會宛に次のようなメッセージがもたらされた。

本日、貴會のヒマラヤ遠征について小谷隆一氏の御來訪を受けたことについて深謝いたします。

社團法人ドイツ・ヒマラヤ委員會は、いかに度かの私達の経験に基き、私達と貴會との間に堅持された友好を通じて、貴會の御質問に助言できまするならば幸甚の至りです。

一九五四年六月
心からなる登山者の
挨拶をもつて
ポール・パウアー

名譽會員を圍む會

六月七日(日曜日)京大アンナプルナ隊のスライド映寫會を兼ねて名譽會員を圍む會を催した。生憎の雨天にも拘らず多数名會員の御參集を願えた事は幸であつた。

先般越後の高頭さんを模會長が訪問された節、持歸られた高頭さんの「三山を土産に持ちて死出の旅」という辭世が、會員松本熊次郎さんの御好意で表装されたものをルームの一隅に掲げ、しばし本會創立當時の懷舊談に花が咲いた。

なお田部重治さんは缺席の御通知あつたので一同寄書を御送りした。その來信によれば最近健康勝れず引込み勝ちの由、此欄を借りて會員諸氏にお傳へして置きます。(成瀬)

出席された名譽會員は次の諸氏
武田久吉、高野鷹藏、近藤茂吉
鳥山悌成、冠松次郎、榎有恒、
辻村太郎

マナルス基金芳名(敬稱略)

- ▼三千六百圓 小原勝郎
- ▼二千圓 別宮貞俊
- ▼二千圓 櫻田山岳會 村井米子
- ▼一千圓 日綿實業株式會社 山田和雄 富田治三郎 新潟鐵道管理局登山講習會員一同 郡山山岳會 京極實
- ▼五百圓 島田芳文 齋藤捨治
- ▼千田修三 權藤太郎
- ▼二弗 矢野芳太郎(在南米)
- ▼一弗 高田實(日本公使館)

ナイロン、麻、綿製

各種テント、リュツク、アノラツク、

ザイル、スリーピングバツクの専門店

三喜産業

東京都千代田区大手町2-4
電 和田倉 (20) 4810.4984.4985

藏王の狐

朝比奈菊雄

山岳関係の出版をしている若
 溪堂の坂本さんが、山の随筆集と
 いったもの、それもお座なりでな
 いしつかりしたものを出したいと
 いう希望があると、友人のA君に
 聞かされ、そんなら一つお手傳い
 させて貰いたいものだとし入れ
 てから間もなく、第一回の編集會
 議を兼ねて藏王山に名残りのスキ
 ーをたのしもうとの計畫が、A君
 の斡旋で成立した。

之を要するに坂本さんのおごり
 で、未だ一べんも行ったことな
 い名山「藏王山」を心ゆくまでエ
 ンジョイ出来るということには
 ならない。シメシメとひそかにほ
 くそ笑んで、四月初めのある夕
 方、古いイタリヤのスキーをかっ
 ぎ上野驛の雑踏にまぎれ込んだ。
 夜が明けて来ると車窓から白い
 山々が望まれる。ほとんどこちら
 に来たことのない小生にとつては
 頗る新鮮な風景である。ねぼけ眼
 をみはつて右に左にA君の説明を
 聞くのに忙がしい。

山形は良い天気である。所がバ
 スが出ない。目下道ぶしん中で、
 開通は明日からだという。困つた
 ナ、頑張つて歩くか、とも口ばし
 つたが、無理しないで明日に備え
 ようというA君の提議に小生は忽
 ち陥落した。坂本氏ももとより紳
 士であるから殊更に異を唱える様
 な心なき業はとらない。それでは
 今日編集會議にしましようとい
 うことになった。

早稲田の大先輩であるG氏の經
 營されている當市御挨拶の旅館
 に荷を置き、G氏に御挨拶したの
 ち、散歩かたたく天童まで足を伸
 す。天童とは即ち山形市周辺の温
 泉である。着いてみると、一面の
 田圃と畠の中に、古いのと新らし
 いのと建物が並んでいる。改築中
 のも何軒かある。嘗ては鄙びてい
 た村の温泉宿が、今や赤線地区め
 いた建物にとつて代られようとし
 ている眞最中である。

しかし、此處から見はるかす自
 然はなかなか良い。月山のドーム
 が夢のクラゲのように春霞の中に
 浮び上り、朝日の山なみがきらき
 らと深雪のひだをたふんで平野の
 果を劃している。信州の山のように
 特徴のはつきりした形というも
 のはないが、とらえがたいまぼろ
 しをおもわせる美しさだ。

夜は旅館で折柄朝日から眞黒に
 焼けて戻つて来た地元山岳會の人
 たちや、熊狩の名人P氏と歓談し
 た。A君は仔細らしく半紙に記録
 をとつて、編集會めいた體裁をと
 りのえていた。

★

翌朝、我々のバスはサンサンた
 る朝陽の中を疾驅して修理成つた
 道路を無事根據地高湯へ到着した
 共同浴場に入浴に行く。ガラン
 とした広い浴場に誰も居ない。こ
 いつは豪氣だと、悦に入つて飛込
 んで見て驚いた。すぐくヒリヒリ
 する。何でも草津より硫酸分が多
 いのだという。手拭なんか直ぐボ
 ロボロになる相だ。

空いているのも當然である。雪
 は温泉からある。急な石段を登つ
 て、社の裏手から斜面に出た。動
 かないリフトが春の陽を浴びてい
 る光景は、さすがシーズン・オフ
 のわびしさである。峠に露出した
 熊笹にザツクをうづめて休む。こ
 ろよよい疲労感に、タバコの煙を
 好い氣になつて吹き上げてい
 るが、否應なしに眼に飛込んで来
 る龍山の山肌の赤くガレた眺めは
 さゝか度きつい。そこからスキー
 を着けて、もう小屋も間近のた
 と、晝近い、けだるいふんい氣を
 呼吸しつゝ進んで行つた。

山の家が見えて来た。美しいぶ
 なの林にとり巻かれて氷の半ば解
 けた獨鈷沼が輝いている。このあ
 たり残雪は未だ深く、汚れない
 白の世界を保っている。むらさき
 色のぶなの幹は、幾重もの垣をつ
 くり、梢の彼方に遠い地藏岳が稜
 線を連ねている。

ちらりと、色めいたものが――
 黄色のような赤いようなもの――
 きわ立つて目だつたものが、ぶな
 のスクリーンの間から見えた。近
 づいて来る。此方に近づいて来
 る。周囲の風景とはまるつきりか
 けはなれたものが、此方に近づい
 て来る。

女だ。若い女だ。着物を着てい
 る。黄八丈に伊達巻をしめた女
 だ。どうしてこんな山の中でそん
 な恰好をしているんだか、いくら
 考えても判らない。齡不惑に近
 く、大ていの世の中のことを知り
 つくしたと自惚れている小生の頭
 蓋骨の中、幾百萬の脳細胞を狼
 狽した悟性が空しく、駈けずり廻
 る。あり得べからざる事實、説明
 し得ぬ現象である。

女はおどろくほど美しい。斷髪
 で、やゝ小柄の、猫のような弾力

をおもわせる。我々をちらりと
 見、深いけれども、もう堅くなつ
 てもぐらない雪を、ちいさい白足
 袋の日和下駄で踏んで、沼の岸を
 めぐり山の家の中に消えた。

固唾を呑んで眺めていた小生た
 ちは、やがて我に返ると顔を見合
 せた。

「狐が出たな」
 そう云つたほど、今見たものは
 現實感が稀薄だつたし、また美し
 くもあつたのである。

山の家から男が一人出て来た。
 我々を認めて歓聲をあげた。先輩
 のK氏だつた。午後我々はK氏と
 一緒に地藏まで登り、太陽とスキ
 ーを満喫して戻つて来た。狐はお
 いしいお茶を一同に御馳走して呉
 れた。

狐はK氏の愛人だつた。一週間
 ほど前――しよに登つて来て、あと
 一ヶ月ぐらい滞在するのだと聞い
 た。もう幾年も前からのことだと
 いうが、K氏の仲の良さは、は
 たの眼からも快いものであつた。
 美しいものかと思つたことは何と
 生ばかりではなかつたのである。
 狐の存在によつて四月の藏王は、
 いまもきらきらと記憶の中に不滅
 の輝きに満ちてそびえている。

肝心の本の編集は、小生の怠慢
 によつて、それからとうとう一年
 たつてしまつたが、その代り、申
 し分のない適當な執筆者を網羅す
 ることが出来、完璧を期していよ
 いよ誕生の運びになつたことをつ
 け加えさせて戴くことにする。

五三・四・三〇

高所用露營天幕 登山とスキー用具

千代田區神田 須田町 2-23 細野商店 電話(25)6428

カワミヤのアルパインソール
 耐久・不磨耗・滑止
 あらゆる点で NO 1
 合資会社 代表 平林 三郎

カワミヤ靴店

東京都大田区大森 8-3740
 TEL (76) 5882



圖書紹介

ベルナル・ピエール著
 サルカントイ征服
 寫眞一四葉 地圖三葉
 一九五三年巴里アミイ
 ヨ・デユモン刊行

ベルの東南アマゾン河上流の
 ヴイルカバンバ・コルディレラ山
 系の盟主サルカントイ(六三〇〇
 米)に一九五二年八月佛人三名米
 人六名のパーティが初登攀した記
 録である。大西洋を隔てる未知の
 岳人が手紙で打ち合せ、ベルの
 首府リマで落ち合い、隊長をきめ
 ず相談すくか多数決で進退を決
 し、仲よくやつたところは面白い。
 一行は飛行機で登路の見當をつ
 けた上、インカの舊都クズコを出
 發し、四四〇〇米の峠で山の南側
 に達し、さらに新雪を冒して四五
 五〇米の峠を越えて東側にまわ
 り、四四〇〇米のところにベス
 キヤムプを設け、東北面の側氷
 雪の上にC I (四九〇〇米) C II
 (五四〇〇米)をはり、悪天候に
 はばまれて撃退されたのち、八月
 五日山稜にとりついで午後四時半
 頂上をきわめ、山稜上六一〇〇米
 のクレヴァス内に野營した。一行
 にはアルバータ登山でおなじみの
 オバリン、アイレス兩氏や、會
 報一六三號の書評で紹介すみのコ
 ーガン夫人(夫君はコルディレラ、
 ブラシシュ適征の後急死した)な
 どがいる。
 著者は三十四才、フランス新進
 のアルピニスト。登山記百ページ

の外一八〇頁をさいて(1)ベル領
 アンデスの記述と文献(2)裝備と食
 糧についての説明と注意(3)佛、西、
 土語(キチユア)對譯の語彙をの
 せ、甚だ親切に出来ている。

著者によるとこの方面の登山
 は、未知の境で處女峯に富むが登
 路が判明せず、土人は皆目登山の
 経験がない上迷信ふかく山を恐れ
 て高所に幕營することを承知せ
 ず、その指導と操縦に骨が折れる
 などいろいろ困難を伴うがそれ
 だけに他處で味わえない面白味が
 ある。ただ赤道に近いため朝夕の
 薄明がなく、晝夜半分で夜が長い
 のが困ると云う。(會報一六七號
 マザマ誌記事紹介参照。兩者の間
 には各所の標高に喰い違いがある
 がその儘にしておいた)(S・H)

川崎隆章・近藤等編
 山岳講座 第一、第二卷

A 5判・二〇〇頁・寫眞
 八 葉・三〇〇圓・白水社

かつて一世紀程前に、アルプス
 登山の黄金時代に育つたアルピニ
 ズムも、昨年のエベレスト登頂に
 よつて、再び新たな時代が訪れた
 と見るべきではなからうかと思
 う。

この時に當り、稿を新にして山
 岳講座の出たことは喜ぶべきこと
 であると信じる。

かつては一部好事家の探検乃至
 は冒険でしかなかつた登山も、科
 學的な成果を上げ、やがてスポー
 ツに純化されることによつて、次
 第に一般の人々の間にも普及する
 ようになつて來た。この登山の發
 展史こそアルプスからヒマラヤへ

の登攀史の裏にあるものである。
 更に、この一世紀にわたる人類の
 勝利の底には、選ばれて登頂の榮
 を得た英雄の後に支える無名の人
 々があるのだが、そのピラミッド
 の底邊は、いやひろがりひろがり
 つて來たのであつた。レクリエー
 ション運動は山登りへの一般的関
 心をひろめたし、遠征隊の派遣は
 登山技術のみならず、食糧に裝備
 に一般産業界をも刺戟したのであ
 つた。

更にスポーツをして盛にならし
 めた大きな理由に、私は宗教的代
 替的な役割を数えたい。社會的地
 位も、財産もこゝでは何の役にも
 立たず、互に決めたルールと、裸
 になつた時の實力だけが勝負を決
 定する世界、それは神の裁きに従
 う世界と同じだからである。

動機が何であらうと、一度山に
 踏み込んだ人にとつては、第一卷
 の初頭に藤木九三氏が「初めに
 おどろきありき」と書かれた感激を
 経験せずにはいれないであらう。
 毎巻、巻頭に掲げられた八頁の山
 の寫眞は、未だ見知らぬ山であつ
 ても、心を踊らせる程の力作ぞろ
 いである。色刷りの表紙の寫眞は
 口繪にくらべてもう一步という感
 があるのは惜しい。

内容は四分の一程を直接の登山
 コースの案内に、残りを登山に関
 連した多方面の専門家の論文をの
 せているのは讀みごたえがある。
 その論文の合間に随想が時々はさ
 まれているのは小休止の効果をよく
 心得ている編者の功である。圖
 版も多量に入れてあり、具體的で
 よい。全巻完結を待つ。(吉阪)

西岡一雄・海野治良
 諏訪田榮藏著
 登山技術と用具

B 6判・二七〇頁・寫眞四
 葉・二二〇圓・山と溪谷社

夏ともなれば「海へ山へ」と叫
 ばれる。これは人間の本性として
 自然を求めた聲なのである。そ
 して山に憧れる若い世代は更に山
 の魅力に引かれてゆく。社會人團
 體山岳會、學校山岳部に入つた新
 しい人達には、先輩の指導により
 傳統に基いた生活を送り、將來の
 自己の山に對する理念と技術を形
 成し、個人山行を主とする人も、
 夏山を樂しむと共により高きもの
 を望む爲の基礎を培う機會でもあ
 る。併し登山が單なる遊びではな
 く低山に於ても危険性を含むこと
 は今更云う迄もないことだが、優
 秀なリーダーの指導を得られる人
 は少く、お互の研究や経験の淺さ
 に疑念を抱きつゝ又は全く間違つ
 た方法を意識せずして登高する人
 達が多く、物心兩面に互つての指
 導が今日程強く要望されている時
 はない。

本書は三人のベテランの執筆に
 より、登高に對する精神、その爲
 の裝備用具の研究使用方法を全般
 に精細に解説し、その項目より見
 つてもさすがに優れ、現在使用され
 つゝある新しい用具についても完
 全とは云えぬ迄も、初級・中級者
 向の良き指導書と云える。西岡氏
 が「序にかえて」の中で各々獨創
 的な技術があると云われる通り、
 讀者中には異つた意見も出るとも
 思われるが、各執筆者の一貫せる

五月小集會(一六一回)

五月廿日大(木)
 於體協會議室

來朝中の伊太利山岳會員フオス
 コ・マライニ氏にシツキム、テイ
 ベット、ネパールにわたる山岳旅
 行談をうかがう豫定であつたが、
 同氏御多忙のため邦語講演の草稿
 が間にあわぬ爲に同氏近作の左記
 十六ミリ映畫と、今回來朝の目的
 であるアイヌ熊祭り原色スライド
 を見せしていただいた後、シツキ
 ムに一九三七年に伊太利の著名な
 東洋宗教學者ジョゼツベ・トウツ
 チ博士に隨行された際の旅行談を
 うかがつた。映畫はマ氏自身の撮
 影になる、サウンド十六ミリとい
 ずれも美事な楽しい映畫であつ
 た。マ氏は當分滞日される御豫定
 の由なので改めて戦前、戦後に亘
 るヒマラヤ山麓地方の旅行談をう
 かがう機會を得たいものと思ふ。
 尚マ氏はかつて日伊交換學生と
 して北大・京大等に在學、考古学
 を研究された優れた知日學究岳人
 であり、その著書中「シクレット
 ・オブ・チベット」は英・獨・佛
 の各国語に譯された名著である。

映畫

エトナ火山スキー滑降
 アベトウネ村(中部伊太利)の
 スキー
 リヴリオの夏スキー(サンマー
 スキースクール)の生活(クリ
 スタル山一三七〇—スキー登
 山)

× × ×

山への熱情と、登山は自己の完成である。その行爲と同じように、或は行爲より以上の大切なことは山をつかむことである。等の言葉を充分に味い理解して欲しい。

用具の中でスキー用具は専門書に譲るとし、修理用具の若干を上げられた程度であるが、スキー技術は別として登山用具としてのスキー用具の項が欲しい。なお執筆が三者である点でそれ／＼ずれがあり、特に云々すべき問題ではないが懐中電燈の携行形式にしても異つた意見が出ており(一八頁・二二五頁)初級・中級者向であれば統一が欲しく、ザイルにしても衝撃試験では人間一人が一〇メートルも落ちれば切れるほどである。ハーケン技術は約五メートルに打つことを要求しているのもむべなるかなである(五〇頁)。「ザイルパティ」の各人の間隔は十米乃至十五米が適當であり(一六五頁)では、熟達者は別として初めてザイルを持つ者は勿論一般のザイル使用者は適切な方法に迷い、引いては他の記事の信頼性へも影響するとも思われる。改めて出版される場合は眞の技術用具のエンサイクロペディアと云われるものを出されることを希望する。(K・F)

三田 幸夫著

山なみはるかに

B6判・二七四頁・寫眞九葉・並製(フランス装)・三百圓・特製(箱入)五百圓
白水社

既に四十年の歴史を持ち、各人

各々あれだけの業績を持ちながら慶應山岳部出身の著者が一冊たりとも山に関する著書を公にしたりとない。横さんは別格だが——という事はむしろ不思議に思わざるを得ないのであるが、これが慶應山岳部四十年に渉る傳統の謙虚なる精神の表微でもあるのだ。

著者などはその登山歴から云つても、又その文才から云つても當然トックに一冊の著書位は出しつて貰いたいといふが、今回白水社が遂にその願望を達してくれた。「草鞋の旅」以下「マナスル通信」に至る迄の各篇の隨所に見られる著者の謙虚な態度と人情の豊かな一面が實にこの書の値打ちであり、たとえ著者と面識の無い者でもこの書に眼を通せば、必ずヤマヤ遠征隊の隊長に推されたのも宜なる哉と肯ずくことだらう。その序文に横さんも述べていられる様に、著者のとりつくりうことのない、いわば平凡に徹しているような風格と云うのは實は著者の謙虚なる精神、人情味豊かな態度の一面でもあるのだ。

三田山上の圖書館裏のあの穢ないルーム。もつと詳しく云えば著者の仲間が好んでよく出掛けた吾妻山硫黄製錬所の小舎のそれを眞似た滑車を利用して徳利の重みで戸の開けたてをするルームに、山行きの旅費を捻出するために天幕にくるまつて寝起した下宿代を浮かしたりした仲間が屯して或はヒマラヤを夢見、夜を徹して語り合つたルームの空圍氣は實によく

「三田の山岳會の頃」「大島亮吉君

の片貌」「インド通信」に表われており、如何にも山の仲間の集いと云うものが楽しめるものであるかという事を思出させるものである。嘗ては慶應山岳部内のお家騒動と云つては大げさだが——の節。このルームに集り来る部員の中でも山に縁遠い話をする奴は除名處分を蒙つた事件があつたが、著者などはその急先鋒の一人であつた程、山のトリコになつていたのである。併し或時代には誰しも經驗する登高熱に酔わされた若人の眞剣さと樂しさを語る一面であり、筆者にもその氣分はよく判るのである。

「マウン・アルバータ遠征記」「冬のロータン峠とクル溪谷その他」「ヒマラヤ山麓の思出等は地豊の興味の上に更に著者の文才の豊かさを加えたものであり、「マナスル通信」等は如何にも隊長としての風格と人情の豊かさを彷彿たらしめる一文である。

筆者はさる大先輩から「いゝ老人になる事は難かしい」という言葉聞いたが實に名言である。後輩の連中からは尊敬を集め、黙して人をひきつける先輩としては著者等はその第一人者ではなからうか。

なおこの著が著者とはルーム時代からの仲間の一人たる佐藤久一朗さんの装幀であるという事もこの著書の意義を一層深からしめるものである。(成瀬岩雄)

山登り

新書判・一八〇頁 一〇〇圓 朝日新聞社

慾を云えばキリがないが、こうした初心者のために山登り全般にわたつた入門書をまとめることは極めてむずかしいもので、この書はその點では一應成功しているといえる。

十人の執筆者の間にズレもなく一本にまとめあげたのは編集者の功と云えよう。アサヒ相談室シリーズの目的にも副うようすべての點で懇切な解説と指導が試みられている。

初心者向きとはいへ、内容を仔細に検討すると獨り初心者だけではなく、いわゆる登山家と稱せられる人たちにも示唆するところ少くない。通勤の電車の中や山への往復の途中ポケットに入れておいて一讀しても決して無駄ではないと思う。

知つていようで、案外忘れてしまつていふことをあちこちに見出すであらう。そんな意味でこの小著はなかく、楽しい山の本だ。とにかく、ほんとうの山登りはこの小著はなかく、楽しい山の本だ。とにかく、ほんとうの山登りはこの小著はなかく、楽しい山の本だ。

とにかく、ほんとうの山登りはこの小著はなかく、楽しい山の本だ。とにかく、ほんとうの山登りはこの小著はなかく、楽しい山の本だ。

強いて注文をつければ、裝備や技術のところにも解説の圖版を入れた方が親切であり、北アルプスだけでなく日本の代表的な山々の特徴ぐらゐには觸れてはしかつたが、限られた頁数ではそれまで望むのはムリかも知れない。(Y)



日本山岳會編 アサヒ相談室 定價 100 円

山登り

朝日新聞社

これから山登りをはじめようとする人々にその基礎的な知識と教養を提供するとともに技術裝備など激しい進歩發展を見つゝある今日經驗豊かな登山家にも示唆する所多い絶好の指導書である。〔重版發賣〕



通信 會員

春のオプタシケ山

奥田 五郎

旭川から眺めると、十勝岳とトムラウシ山との中間に小さいが鋭いピークを見せている二〇一二米のオプタシケ山。積雪期に、美瑛川上流側より、まだ歩かれてない北西稜を登りたいと考えてから既に三年目になる。特にアイゼンによる約千米の登高を試みたかったのである。

一行は北海道學藝大學山岳部員の郷、濃谷、上野等四名。

四月三十日(晴) 旭川(一五・〇八發)―汽車―美瑛―國鐵バス―白金温泉―造材小舎泊(一七・四〇)―美瑛岳(二〇五二米)―オプタシケ山の頂上が實に美しい。

五月一日(晴) 小舎(六・〇〇發)―美瑛富士澤を八〇〇米で、以下大略等高線沿いに美瑛川を溯行し、水線記入の澤(一〇・三〇)―オプタシケ山直下北西山稜の合流点キャンプ(一五・一五)此の澤は殆んど瀧の連続で、函になつてゐる。雪は十分緊つていて、

森林限界の彼方に聳える目的のピークは特に美しく我々に迫つて来る。

翌二日は夜半より、風速一五米となり、一日中滞留。

五月三日(晴) キャンプ(六・〇〇)―雪崩のデブリに覆れている北西稜西側の瀧を登る。高さ三〇米位の瀧の連続は青白く凍つていて、ステップを切り乍ら、アンザイレンして進む。アイゼンは實に快道。平均斜度二〇内至二五度位。此の間昨日の雨で生じた樹木の雨水が、日出と共に離れ落ち、瀧の中を落下して、さまざまの大きさの雨水の粒が、云い様のない音をたて乍ら、はげしく轉落して来る状態には、いささか困つた。

此は十時過ぎ迄続いた。一七〇〇米附近で北西稜線に取付きオプタシケ山頂(九・三〇)―あとは、邊別岳(一八五八米)―邊別岳を下り一八〇〇米稜線より美瑛富士(一八五八米)を一四〇〇米に巻き―オヤウシナイ瀧東北尾根―白金温泉(一六・三〇着)。頂上よりの眺めは、實に素晴しかつた。特にトムラウシ山、石狩岳、ニペソツ山等である。

尚美瑛富士を國境稜線沿いに東側、地圖「テ」の六〇米下に、昨春秋に新しく出来た美瑛富士小舎がある。二階建てで、立派な小舎である。(所屬神樂營林署)

地圖―十勝岳、十勝川上流(二九・五、一二記)

峠 三 つ

藤島 敏男

かつてスイスでアルプスを少し

ばかり登り歩いたとき、SACのどこかの支部の、相當の老人も交えた懇親行の一隊が、山頂を目指さず、氷河を傳つたり峠を越えたりしてゐるのに出會つて、いかにも楽しそうなのを羨しく思つたことがある。そういつた山歩きをしたいと候補地を探したが、先ず週末に大群の殺到しない所で、高い山を仰ぎ、深い谷を溯り、うちひらけた眺めをもつ峠を越えるような行程、その上苦にならない程度の荷で済むところということになると、仲々オイそれとは見當らない。トマのつまり一週間、次ぎのようないともびやかな山旅をした。

五月三十日東京―甲府泊。卅一日桃ノ木瀧―ドノコヤ峠―西山温泉。六月一日デンツク峠を二軒小屋へ。二日西俣を小西俣出合まで溯る。三日三伏峠越え南澤營林署小屋泊。四日鹿鹽瀧泊。五日伊那大島へ出て歸京。

谷間は新緑、高みでは残雪を踏み、高い山々はいかにも初夏らしい雪の雫が美しかつた。河でいえば富士、大井、天龍の三大河、山は白峯赤石の一角を横に貫いた譯である。地元の人達が例えれば四時間半で越すデンツク峠は、十時間かけるといつた具合だつたから、ゆつくり山谷の風物を觀賞し展望をたのしんだのはいうまでもない。三つの峠が千五百、二千、二千六百と段々高くなつてゆくのもよかつた。はるばる釣竿をかつぎ歩いて獲物はついに山女魚一匹だつたり米飯抜き食事が二三度續くと大和民族の腹に力がなくなつたり、人口八千八百萬、登山熱旺

盛の時世でもこんな氣紛れなコースでは殆んど登山者に會わないことが分つたり、いろ／＼話の種も出来た。(同行三人、加藤泰安、川喜田壯太郎、藤島敏男)

霧の蔵王越え

村上 金吾

朝六時十分蔵王高湯を出發。折から霧は深く展望は全然きかないけれども、道はよく、それに道標も完備しており、何の不安もなく七時五分にはドツコ沼の山の家、紅葉峠、笹平、ザンゲ坂を経て八時三十分石地蔵の平につきました。道のほとりにはマイズルソウイワガミ、ヒナザクラ、ミネズオウなどが咲きみだれ、人ひとり逢わぬ霧の日の山もまたたのしく、地藏岳頂上を経て、九時三十分最高峯熊野岳の頂上。青空がすこしのぞいてきましたが依然霧は深く、お釜も五色岳も片影だに現われません。それから刈田岳と鞍部の馬ノ背におりるのですが、導標も積石もなく、ちよつと困りました。しかし馬ノ背から古い樺切がとびとびに立つてゐるので、十時三十分わけなく刈田岳頂上につきました。ここには最近できた立派な石室もあり、メートル指導標という堂堂たる石柱も立つてゐますが、さしあたり私には岷々温泉へのおりがわかりません。それでも私は一度東側から西側へ越した経験があるものですから、どうにか山をおりて十一時五分に大黒を通過しました。ところがその

都内の山小屋

広瀬 潔

今回代々木の拙宅「白樺山荘」の一部を、都内登山家の會合用として開放しました。両方共それ／＼利用者があつて、先日甲州の旅の歸途、新宿驛に終列車で着いた千葉郊外の女子登山家達が、新宿附近の旅館へも行けなからと、當山荘を利用して行かれました。營利事業でなく、登山界への奉仕で、會合も半日一人五十圓。簡易宿泊(寝具食事なし)一泊百圓でお世話してあります。(寝具食事の用意もできます)

次頁五段目へ続く

會務報告

役員會

五月 役員總會(七日)

出席者 榎會長 理事成瀬・渡邊
沼倉・小原・金坂・折井・外山・
吉阪 評議員沼井・岩永・神谷
監事石原 關西支部部長篠田

▼議事

一、昭和廿九年度理事役割決定の件

總務部 (總務)成瀬・交野・小原

(經理) 沼倉 (支部) 交野

(圖書) 初見・外山

出版部 (會報) 渡邊 (山日記)

渡邊 (山岳) 吉阪

事業部 (學生)金坂・千谷・舟橋

(團體)渡邊・金坂 (集會) 交

野・外山 (研究)今村

渉外部 成瀬・折井

二、常務理事選任の件 成瀬・渡

邊・交野・小原・沼倉・金坂

三、支部規定・贊助會費・處

務規定作成方希望の件 (沼井評

議員)

四、評議員・監事の役員總會に於

ける議決權に關する件 (沼井評

議員)

▼報告

一、高頭名誉會員御見舞の件 榎

會長

二、早大山岳部昭和卅年度カラコ

ラム遠征計畫の件 吉阪理事

五月 理事會(十二日)

出席者 榎會長・日高副會長・理

事成瀬・渡邊・初見・金坂・小

原・外山・折井・今村・沼倉・

監事石原

▼議事

一、昭和廿九年度評議員推舉の件

二、評議員の議決權に關する件

五月 役員總會(二十一日)

出席者 榎會長・日高副會長・理

事渡邊・沼倉・小原・金坂・初

見・外山・今村・吉阪・千谷・

評議員・沼井・岩永・村井・監

事石原

▼議事

一、評議員決定並に常任互選の件

沼井・別宮・岩永・神谷・三田

(以上常任)入澤・伊藤(秀)・早

川・竹節・堀田・村井・藤木・辻

二、評議員の議決權に關する件

評議員は議決權を持たぬものと

する。

三、役員總會並びに理事會開催期

日の件

自今役員總會は隔月開催し、理

事會は毎月開催・會長・副會長

理事・監事をもつて構成・常任

評議員は陪席する。尚議事録は

全役員に送附すること。

▼報告

一、新潟鐵道局登山講習會に講師

派遣の件

六月 理事會(九日)

出席者 榎會長・理事成瀬・渡邊

交野・小原・金坂・今村・千谷

折井・沼倉・初見・監事石原・

常任評議員沼井・岩永・神谷

▼議事

一、五拾周年記念事業委員の件

沼井・日高・神谷・藤島・島田

の各氏に委員を依頼することと

し、會長・副會長・常務理事を

加えて委員を組織し記念事業

の大綱を決定すること。

は更に具體案の提示を待つこととする。

三、マナスル再舉の件

四、圖書基金及びルーム維持基金設定の件

會員よりの任意寄附により兩基金を設定する事とし、これが經理は別途經理の事とす。

五、「山岳」第四九卷掲載廣告料金の件

左記の通りに改定す

表裏見返頁各壹萬圓・全頁五千圓・半頁參千圓・四分一頁貳千圓

▼報告

一、マナスル登山隊の近況榎會長

二、「山日記」及び「山岳」第四九卷編集狀況交野

三、圖書室火災保險付保の件沼倉

四、朝日新聞社刊行「山登り」完成の件渡邊

五、月例會計報告

第一六〇回小集會

六月十七日 午後六時半 於ルーム

▼マナスル科學班報告

中尾 佐助氏 川喜田二郎氏

中尾氏は植物に關する話でその豊富な寫眞と共に興味深いものであつた。中尾氏の話では、ネパールの植物は特に期待した程のものではないとの事であつた。併し乍ら學界に誇るに足る新種の發見も多數あつた由。

川喜田氏の話は珍らしく、特に今回のマナスル登山の妨害事件等の話を聞いた後に參考になる様な話も澤山あつた。

終りに京都から懇々本集會のため上京された二氏に對し此處に

厚く御禮申上げる。

ルーム維持寄附

▼五百圓 西川博氏

前頁五段目より続く

庭の白樺林を透し、代々木の森の展望も廣く、交通も便利で、新宿驛より十五分、京王初台驛より三分。気軽に御利用願います。差當り會合は三十人迄、宿泊は十人迄としましたが、利用者が多ければ設備の擴張改善もします。案内書は「東京都澁谷區代々木山谷町二三三白樺山莊」宛申込めば郵送申上げます。

昭和二十九年七月廿五日發行

東京都千代田區

神田駿河臺四ノ六

發行所 社團 日本山岳會

編輯者 渡邊 公平

電話神田(25)八九五二番

振替口座東京四八二九番

東京都港區赤坂溜池五番地

印刷所 株式會社 技報堂